

景気動向指数研究会 議事概要

1. 日時：平成 19 年 12 月 17 日（月）11:00～13:00

2. 場所：共用第 4 特別会議室（中央合同庁舎第 4 号館）

3. 出席者：

（委員）

吉川 洋座長、刈屋武昭委員、小峰隆夫委員、嶋中雄二委員、櫛 浩一委員、
福田慎一委員

（事務局）

黒田昌裕経済社会総合研究所長、広瀬哲樹経済社会総合研究所次長、
鈴木英之総括政策研究官、館 逸志景気統計部長 他

4. 主要議題：

- (1) 福田委員報告（景気とは何かについて）
- (2) C I を中心とした景気動向指数の公表について
- (3) 最近の景気動向指数の動きについて

5. 議事進行：

開会

福田委員報告（景気とは何かについて）

福田委員より、資料 1 に基づき、景気指標としての C I の特徴、D I や G D P との違い、C I の計算方法や採用指標の選択、現行 C I の課題と中長期的な改良の必要性等について、C I を中心とした景気指数を公表しているアメリカの事例に言及しながらの説明があり、その後、意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

- ・ 景気とは、先行指数・一致指数・遅行指数を合わせた総合的な経済活動だとすると、一致指数だけを取り上げるべきものなのか、また、一致系列を 4 分野の指標に集約してよいのか、といった根本的な議論を行うべき。
- ・ 実感に合わないという場合の実感とは何か。また、量感という場合、C I が経済全体を表す指標なのか、変化方向を捉えることを重視した指標なのかによって選択指標が異なるのではないか。
- ・ あまり循環的な動きを示さないが重要な分野の指標（サービス業関連など）を含める

か、景気に敏感な指標だけを入れればよいか、という問題がある。現行の採用系列は、両者のバランスを取り、中間的な構成としていると考えられる。

- ・ 先行C Iは一致指数より先に動いて信号を発する役割は果たしているが、現行の先行C Iを見ても量感を表わすことは難しい。
- ・ 景気の実感という点では、景気動向指数と景気ウォッチャー調査との関係を検討してみてはどうか。

C Iを中心とした景気動向指数の公表について

前回の研究会で委員の合意を得た、C Iの更なる活用を図り従来のD I重視からC I重視の景気動向指数への移行を想定した課題について、資料2に基づき事務局より検討状況や移行のタイムスケジュールについて説明。その後意見交換を行い、平成20年4月分（速報）からC Iを中心とした公表形態へ移行することが望ましいということにつき、合意した。

主な意見は以下のとおり。

- ・ C Iへの移行にあたっては、寄与度により変化要因を表示することや、C Iの見方についてのわかりやすい説明に努めるべき。また、景気基準日付の判定方法に変更がない点は、はっきり明示すべき。
- ・ C I移行に賛成。移行の意図についてしっかり説明することが重要。また、基調判断や先行指標の解釈は難しい点である。
- ・ 公表にあたっては、透明性を確保してほしい。また、先行C Iによる基調判断のあり方もある程度マニュアル化して説明するようにはどうか。29系列全てによる総合指数を参考として公表することも有用ではないか。
- ・ グローバルスタンダードとしては先行C Iが重視されている。中期的には、先行C Iの活用方法を検討しておくべきではないか。

最近の景気動向指数の動きについて

事務局より、平成19年10月分（速報）のデータに基づく景気動向指数の動きや現時点で暫定的に作成した資料3ヒストリカルD I（一致指数）について説明、その後意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

- ・ ヒストリカルD Iを見ると直近が10月だが、ここまで拡張局面が続いている蓋然性が高いということでよいか（異論なし）。
- ・ 29系列全体でヒストリカルD Iを試算してみると、2007年1月から50割れとなっている。また景況感を示す各種指標も軒並み悪化しており、景気動向指数の一致系列

を構成する生産指数、鉱工業生産財出荷指数、大口電力使用量、投資財出荷指数などはかなり印象が異なる。

- ・ 採用指標の選択は重要な問題である。採用系列の見直しにあたっては、最近の経済状況を的確に把握する指標を選択することと、過去の景気基準日付と統合的な指標を使い続けることは、トレードオフの関係にあり、どのようにバランスを取っていけばよいかを検討課題である。

閉会

(速報のため事後修正の可能性あり)